投稿

「秋の日はつるべ落とし」（続き）

佐藤 明達

表題の件については本誌で私見[1]を述べたが、2006 年 12 月 23 日、東京・代々木のオリンピック記念青少年総合センターで行なわれた東亜天文学会東京支部例会でこの概要を発表したところ、渡辺美和氏から、この言葉がいつ頃から言われるようになったかと質問された。そこで文献を調査したところ、以下のようなことが判明した。

（ア）歌舞伎脚本作者・河竹黙阿弥（かわたけ もくあみ）作の世話物「勧善懲悪覗機関（かんぜんちょうあくのぞきからくり）」（通称「村井長庵」、1862 年初演）に「もう入相（いりあい、日入時）でござりますれば、秋の日の釣瓶落し、日が暮れるに間もござりませねば、今日はお暇致しませう」
（イ）同じく黙阿弥作「牡丹平家譚（なとりぐさへいけものがたり）」（通称「重盛諫言、1876 年初演）に
「一時（いっとき）あれど秋の日の釣瓶落しに暮れ易し」
とある[2]。

また「故事俗信　ことわざ大辞典」には次のような例もある。

（ウ）「秋の入り日と年寄りはだんだん落ち目が早くなる」
[意味]秋の日が急速に沈むように、老人も急速に老いる。
（エ）「秋の日と娘の子はくれぬようでくれる、春の日と継母（ままはは）はくれそうでくれぬ」
[意味]《「くれる」に「暮れる」と「与える」の両意を持たせる》
秋の日は暮れないようでいて急に暮れるし、娘はなかなか嫁にくれそうもなく見えて案外簡単にくれる。春の日は長くて暮れそうで暮れず、継母は子どもに物を与えそうでなかなか与えない[4]。

次に「秋の夜長（よなが）」については、「日本国語大辞典」に
【秋の夜】
秋の夜、特に、秋の空気の澄んだ夜。長い夜の気持ちをこめて用いることが多く、「長し」の序とすることがある。[例えば]

（オ）『古今和歌集』（905～914）仮名序に
「春の花にほひすくなくして、むなしき名のみ、秋のよのながきをかこてれば」
とある[2]。
（カ）「秋夜長物語（あきのよのながものがたり）」という本もある。これは南北朝時代の男色稚児（ちご）物語。一巻。作者未詳。比叡山の僧桂海と、三井寺の稚児梅若との悲恋と、それをめぐって起きた三井寺と比叡山の争いを描く[3]。

結局、「秋の日はつるべ落とし」も「秋の夜長」も、昔から日本人に共通の普遍的な感じであったことが分かる。
ところで各種の国語辞典の「秋の日は釣瓶落とし」の説明を列挙すると次の通り。

（a）秋の日は沈み始めると、たちまち落ちることのたとえ[2]。
（b）秋の日の沈むのが早いことをいう[5]。

（c）秋は、太陽が沈み始めるとたちまち没して、暮れるのが早いと思われることをいう[6]。
（d）秋の日が急に沈むことを、井戸に落とす釣瓶にたとえていう言葉[7]。
（e）秋の太陽は、いま西日がさしていたかと思うと、釣瓶がすとんと急降下するように、あっという間に日が暮れるということ[8]。
（f）水を汲むときの釣瓶が落ちるように、秋の日脚[昼間の時間]が短くて急速に暮れるのをいう[4]。

昔の人々が四季を通じて日入を観察したところ、特に秋は日の沈むのが早いので、これを「つるべ落とし」にたとえたというのは誤りである。文献[1]で述べた通り、秋の太陽が垂直に沈んだり、日入後の薄明時間が特に短くなるようなことはない。秋は日入の時刻が日毎にどんどん早くなってすぐ夜になるので、その感じを「つるべ落とし」と表現したのである。上掲の説明はあらかた誤りか不正確で、（f）だけがどうにか及第と言ったところである。

佐藤 明達

参考文献

[1]佐藤明達、2007、秋の日はつるべ落とし、「天文教育」Vol.19，No.1，p.41
[2]日本国語大辞典第二版編集委員会編「日本国語大辞典」第二版、小学館、2000、第 1 巻 p.174
[3]上掲書 p.188
[4]尚学図書編「故事俗信　ことわざ大辞典」、小学館、1982、p.9
[5]新村出編「広辞苑」第五版、岩波書店、1998、p.24
[6]尚学図書編「言泉」、小学館、1986、p.19
[7]松村明監修「大辞泉」、小学館、1995、p.23
[8]村石利夫著「日本故事・名言辞典」、日本文芸社、1980、p.6